

父との永遠の別れ — 看護への感謝

【千葉県・関口裕司】

★★★
一般部門
最優秀賞

父は仕事一筋で、私が物心ついた時には、すでに単身赴任の連続だった。学校行事にも家族旅行にも父がいた記憶はない。寂しさには慣れたが、ただ、「父にとつて仕事とは？」という問いの答えを息子として聞きたかった。しかし生意気盛りの自分は、膝を交えて父と話す機会を、とうとう逸してしまった。

晩年、脳を患った父は、病院に迷惑を掛ける存在だった。怒鳴る。点滴を引き抜く。転んで物を壊す。そのたびに家族は叱られ、病院に居づらくなった。転院先では、前の病院で迷惑を掛けたことを正直に話した。「仕方ないですよ。一番辛いのは、患者さんなんです」。この言葉と看護師の微笑にどれだけ救われる思いがしたことだろう。家族の重荷がすうつと取れ、父の様子も穏やかになった。

ある日、父はベッドで嘔吐した。息子である私は思わず飛び退いてしまったのに、近くにいた看護師は、すぐに父の背に手を当て、「関口さん、大丈夫ですよ。楽な姿勢にし

ましよう」と看護する。若い彼女の白衣や髪にまで飛沫がはねていた。しかしそんなことは少しも気にする風でもなく、その後の措置を済ませてくれた。使命感といえれば簡単だが、それは温かな心に支えられた強さだ。

死の3日前、看護師がベッド脇で父と辛抱強く言葉を交わしているのに驚いた。父は部下と話しているようで、彼女もすっかりその部下になりきっていた。突然、父が叫ぶ。「北見の牧場で牛の出産がある。会社の獣医を連れて、雪をかき分けて応援に行くぞ」。彼女が返事をする、父は安心したように目を閉じた。私は初めて父の貴い仕事ぶりを知った。あの時知りたかった、父にとって仕事とはという問いの答えとして、これ以上は必要なかった。

看護という仕事は、看護マニユアルが可能にするのではなく、深い愛に基づいた貴い行いの一つ一つによつて結晶する。

父との永遠の別れは、言葉に尽くせぬ感謝にあふれるものとなった。